

短歌

短歌について

主な歌人と代表歌

石川啄木

一八八六—一九一二

岩手県生まれの歌人。若いころに「明星」に短歌がのせられ、注目をあびました。その後、出身地の岩手県盛岡市、北海道、東京とわたり歩きますが、生活はくるしく、まわりの人から借金をして生活するありさまでした。くるしい生活を背景にした歌が多く、三行に分けてかかれているのが大きな特徴です。(ここでは、行をかえる部分を／でしめしました)

東海の小島の磯の白砂に／
われ泣きぬれて／蟹とたはむる

浜辺の白砂の上でほんやりとかにとあそんでいると、知らず知らずのうちに涙がながれてきた。

「東海の小島」とは、日本のことです。くるしいことが多く、人生がうまくいかずにやんでいた啄木が、泣きながらかにとたわむれる啄木自身の小ささをあわれんでいるようです。

はたらけど／はたらけど猶わが生活
樂にならざり／ぢつと手を見る
はたらいてもはたらいても、生活は樂にならない。じつと自分の手を見つめる。

たはむれに母を背負ひて／そのあまり
軽きに泣きて／三歩あゆまず

この歌を作ったときは、新聞社につどめていましたが、給

このとき啄木は東京で一人で生活し、母親や奥さん、子どもを北海道の友人にあずけたままでした。母親を深くしたいながらも、親孝行をしたくてもできない啄木の気持ちが、母親の軽さと自分の心の重さとなっていました。「母を背負ひて」とありますぐ、実際に背負いはしなかつたようです。

あそびで母を背負つたところ、あまりに軽かつたので軽くなつて、三歩と歩くことができなかつた。



料は安いものでした。家族が病気がちで借金もあったので、生きていくのがやつとだつたにちがいありません。それを自分のせいだと考え、じつと自分の手を見つめたのです。そんな、啄木のなげきがつたわってきます。

不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心

不来方のお城があつたあの草にねころんでいると、夢をもつていた十五歳のころの自分がなつかしく思われる。

「不来方のお城」は、啄木の故郷にある盛岡城の城あとのことです。生活がくるしく、思うどおりにならない生き方をしている自分も、十五歳のころには将来に大きな夢をいだいていのだとなつかしく思い出しています。「空に吸はれし／十五の心」という言い方に、夢がきえてしまつた、せつない気持ちがあらわれています。

やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに

柳がやわらかな緑にそまつてある北上川の景色が目の前に見えるようだ、まるで泣けといわんばかりに。

北上川は、故郷の岩手県を流れている川です。子どものころにすごした北上川の景色を「泣けとごとくに」思い出すことで、くるしい生活をおくっている自分の心がゆさぶられるのでしょうか。「やはらかに」「やなぎあをめる」と、やさしい感じをあたえる「や」の音が続いたあと、「きたかみの」「しべめにみゆ」とかたい感じの「き」の音が対比して使われています。この歌からは、ふるさとをなつかしむ気持ちが強くなつたわってきます。

ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆ 故郷のなまりがなつかしく思えて、停車場に故郷のなま りを聞きに行く。

啄木は、「石をもて追はる」とく（石をもつて追いかけられるように）故郷を出ていきました。それでも故郷への愛情はなくならなかつたのでしょう。「停車場」は、ここでは上野駅のことです。上野駅では、東北地方からの列車が着くたびに、なつかしいふるさとの方言を話す乗客がおりてきます。なつかしい思いにかられて、ふるさとの岩手の方言にふれてみたくなつたのです。

俳句

俳句について

主な俳人と代表句

季語例と句例

河東碧梧桐

一八七三—一九三七

主に明治時代に活躍した俳人です。愛媛県松山市に生まれ、中学校で高浜虚子（→168ページ）と出会いました。二人は親友となり、ふるさとの先輩である正岡子規（→186ページ）の指導を受けながら俳句を学びました。

師匠であった子規がなくなつたあと、碧梧桐は、自分の感情を句によむ「新傾向俳句」の道へ進みます。五・七・五の定型や季語にとらわれない碧梧桐の新しい俳句はたくさん的人に広まりました。碧梧桐のもとでは、のちに自由律俳句で有名になる、荻原井泉水（→149ページ）などが育ちました。

秋の夜や学業語る親の前

（秋・秋）

秋の夜は長い。そんな夜に親の前で学業について語りかけているよ。

秋の夜長に、学校であつたできごとや、勉強したことなどを家

族に語りかけているよ。つすが目にうかびます。

松山の中学校を出た碧梧桐と虚子は、京都の高校に進みます。そのあと、仙台の高校に転校しましたが、十月に退学しました。ふたりで東京へ行き、子規の家に転がりこみます。上京後

は新聞社として働きました。

この道の富士になり行く芒かな

（芒・秋）

すすきにかこまれたこの道を歩いていると、いつのまに

か富士山に入りこんでいっているようだ。

赤い椿白い椿と落ちにけり

（椿・椿）

椿の花は赤い椿と白い椿と順番に花が落ちた。

椿の花は丸くて大きく、ちるときには花全体がぱとりと落ちます。花びらではなく、花が丸ごと落ちるようすは、生命の終わりをあらわしているようです。赤い椿の花が落ちた次の瞬間、別の木から白い椿の花が落ちました。それぞれの木の下に落ちた花がたまっています。

この句は、虚子とともに子規の弟子として勉強していたときのものです。子規は、「写生」の精神があらわれたものとして、この句をとても高く評価していました。



なりゆくとは、なつっていく、うつりかわっていくという意味です。富士山へ続く道を歩いているときによんだ句です。あたりにはすすきが一面に生えて、秋風にゆれています。富士山へ続く、どこまでも広いゆるやかな道の中にいるという感動をよんでいます。

愕然として昼寝覚めたる一人かな
(昼寝..夏)

おどろいて昼寝から目を覚ますと、一人になつていた。

愕然とするとは、とてもおどろくということです。はつと何かに驚いて、昼寝から目を覚ました。家中を見まわすと、家族が全員出かけてしまつていてとても静かだつたといふ句です。

上の句が七文字ある、ふしきなりズムの句です。このころから、五・七・五の十七音にとらわれない句を作ることを考えていたのでしょう。

おもわ
思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇
うまふゆそうび
(冬薔薇..冬)

思ひがけずヒヨコが生まれて、冬の薔薇もさいたよ。

薔薇は、バラとも読みます。冬のバラがきれいにそよぐこと、ヒヨコが生まれることの間に、何の関係もないよう

辻^{つじ}というのは、道が何本かに分かれているところです。牛^{うし}はどこかに連れていかれる最も^{さいちゅう}、その辻^{つじ}でずっと秋空を見回^{まわ}しています。そのすみきつた秋空に、自分の今までの人生を重ねてよんでもいるといわれています。

この句は十七音の定型^{じょうけい}を完全^{かんぜん}にこわし、長い文字数でよまれています。このように長い句をつくったり、逆^{さかへ}にもつと短い句をつくったり、さまざまな表現^{ひょうげん}を試^{ため}してきました。最後には、ルビ俳句^{らびばく}という、漢字^{かんじ}に本来の読み方ではないルビを振^ふってよむ俳句^{ひょうけん}をつくることに挑戦^{ちょうせん}していました。しかし、還暦^{かんれき}をむかえた六十歳^{さか}で俳句^{ひょうけん}の世界から引退^{ひんたい}しました。

曳かれる牛が辻でずつと見廻した秋空だ

ひかれてどこかへ行く牛が、分かれ道でずっと秋空を見回している。

見たものをそのままえがいて季語を大切にするやり方に疑問を抱きはじめて、自分の考え方や実感を大切にする句をよむようになつた碧梧桐は、この俳句を広める活動をはじめました。俳句の伝統を守る虚子と、道が分かれはじめますが、ふたりの友情は、最後までときれることはありませんでした。

思えます。碧梧桐はこの二つを並べることで、いい天気が続
く、冬の陽気をあらわしました。この句は、のちに碧梧桐が
進む「新傾向俳句」のさきがけとなりました。

ペソネーム

西東三鬼という名前の俳人がいます。少しかわった名前ですね。

この「西東三鬼」は、本名ではありません。本名は斎藤敬直です。どうして「西東三鬼」という名前になつたのでしょうか。

どうじん

同じ人誌（おなじ考え方をもつ人があつまつて出す雑誌）に作品がのることになつたとき、世話人から電話がかかってきて「すぐに名前を考えなさい」といわれて、とっさに思いついたのが「三鬼」だったというのです。「西東」は「斎藤」からの当て字です。

うか。

ほかにも、多くの歌人・俳人がペソネームを使っています。

伊藤左千夫 本名は幸次郎。小さいころから「さち」とよばれていたので、その音に「左千夫」という字をあてました。河東碧梧桐 本名は秉五郎。「碧梧桐」は「秉五郎」の音をもしめたものです。

もじつたものです。

北原白秋 本名は隆吉。中学生のときに、友達と文学雑誌をつくつて、みんなでペソネームを考えました。それぞれ「白」

の下に続ける一字をくじ引きしたところ、「白秋」があたつたことからペソネームとしました。

高浜虚子 本名は清。「虚子」は、本名の「清」をもじつた

なのです。正岡子規がつけました。

内藤鳴雪 本名は素行。人の身の上は、自分の力ではどうしようもなく、ただなりゆきにまかせるという考え方から、「なりゆき」に「鳴雪」という字を当てました。

中村草田男 本名は清一郎。父親がなくなつて、跡をつなげればならないのにぐずぐずしていたときに、親せきの一人から「くさつた男だ」とののしられました。それに対して、

くさつた男かもしれないが、そつそつ出ない男だ」という気もちで「草田男」とつけました。

夏目漱石 本名は金之助。昔の中国人が、「石に枕し流れに漱ぐ」（俗世をはなれ自由にくらす意味）と云つて、それを、まちがつて「石に漱ぎ流れに枕す」と言つてしまい、「石に漱ぐのは、歯をみがくため、流れに枕するのは耳を洗うためだ」と言いのがれたという故事から「漱石」とつけました。

正岡子規 本名は常規。「子規」はホトトギスのこと、鳴きながら血を吐くといわれています。結核にかかるてしまい、はじめて血を吐いたあとから「子規」と名のるようになります。

若山牧水 本名は繁。「牧」は母親の名前マキから、「水」は、生まれた家のまわりには川が流れ、滝がかかるついて、水を見るのが大好きだったことから、好きなものを二つあわせて「牧水」としました。

さくいん

◆コラム一覧

病気と短歌

昔の恋と結婚

歌によまれた花

三大歌集はどうちがうの

俳句が自由によめなかつた時代

ペンネーム

俳句と暦

181

167

151

103

79

65

61

短歌さくいん

あ

あひにあひて物思ふころのわが袖に

やどる月さへ濡るる顔なる 伊勢

19

逢ひ見ての後の心にくらぶれば

藤原敦忠

122

昔はものを思はずりけり

藤原朝忠

122

逢ふことの絶えでしなくはなかなかに

小野老

100

人をも身をも恨みざらまし 藤原敦忠

103

122

あをよし奈良の都は咲く花の

斎藤茂吉

45

薫ふがごとく今盛りなり 野守は見ずや君が袖振る

額田王

69

あかねさす紫野行き標野行き

100

103

秋風にはつかりがねぞ聞こゆなる たがたまづさをかけて來つらむ

紀友則

35

秋風のふきあげに立てるしらぎくは 花があらぬか浪のよするか

菅原道真

52

秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

78

108

秋さらば見つつしのへと妹が植ゑし

やどりのなでしこ咲きにけるかも

秋近う野はなりにけりしらつゆの

をける草葉も色かはり行

紀友則

35

秋の田のかりほの庵の苦をあらみ

わが衣手は露に濡れつ

天智天皇

64

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし

宇治のみやこの仮廬し思ほゆ

額田王

68

秋はぎの散りのまがひに呼びたて

鳴くなる鹿の声の遙けさ

湯原王

79

明けぬれば暮るるものとは知りながら

なほ恨めしき朝ぼらけかな

藤原道信

68

明けばまた越ゆべき山の峰なれや

空ゆく月の末の白雲

藤原家隆

70

葦引の山鳥の尾のしだり尾の

ながながし夜をひとりかも寝む

源等

121

あしひきの山のしづくに妹待つと

我立ち濡れぬ山のしづくに

大津皇子

116

朝戸あけて見るぞびしき片岡の

橋のひろ葉にふれるしらゆき

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

源経信

83

吉野の里に降れる白雪

坂上是則

24

120

朝ばらく宇治の川霧たえだえに あらはれわたる瀬々の網代木	藤原定頼	125
朝まだき嵐の山の寒ければ 散るもみち葉を着ぬ人ぞなき	藤原公任	73
あたらしく冬きたりけり鞭のごと 幹ひびき合ひ竹群はあり	宮終二	86
あなごもるけもののことくながきよを		
ほたのほかけにせぐくまりをり	会津八一	11
あなたは勝つものと思つてゐましたかと		
老いたる妻のさびしげにいふ	土岐善磨	66
あな醜賢しらをすと酒飲まぬ		
人をよく見ば猿にかも似る	大伴旅人	23
天つかぜ雲の通ひ路ふきとぢよ		
をとめの姿しばしとどめむ	僧正遍昭	6
天飛ぶや鳥にもがもや都まで		
送り申して飛び帰るもの	山上憶良	54
天の原思へばかる色もなし		
秋こそ月のひかりなりけれ	藤原定家	109
あまの原ふりさけ見れば春日なる		
三笠の山にいでし月かも	阿倍仲麻呂	12
あらざらむこの世のほかの思ひ出に		
いまひとたびの逢ふこともがな	和泉式部	108
あらしく吹く三室の山のもみち葉は		
竜田の川の錦なりけり	能因法師	124

新しき年の初めの初春の 今日降る雪のいやしけ吉事	大伴家持	120
有明のつれなく見えし別れより 暁ばかり憂きものはなし	壬生忠岑	124
有馬山猪名の毎原風吹けば いでそよ人を忘れやはする	大式三位	125
淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝ぬ須磨の閑守	源兼昌	127
あれどもいふべき人は思ほえで 身のいたづらになりぬべきかな		
家にあれば筈に盛る飯を草まくら 旅にしあれば椎の葉に盛る	藤原伊尹	122
遺棄死体数百といひ数千といふ		
いのちをふたつもちしものなし 呼吸すれば、胸の中に鳴る音あり。	土岐善磨	66
風よりもさびしきその音！	石川啄木	61
幾山河越えさり行かば寂しさの 今年ばかりの春行かんとす	若山牧水	95
終てなむ国そ今日も旅ゆく	正岡子規	61
いちはつの花咲きいでて我目には いとせめて恋しき時はむばたまの		
夜の衣を返してぞ着る	小野小町	81
否と言へど強ぶる志斐のが強ひ語り このころ聞かずて朕恋ひにけり	持統天皇	46